〈鳥海山麓だより４〉二〇一二年冬

ここで生きる

鈴木京子

ここひと月は、食事の回数より「雪除け」した回数のほうが絶対に多い。つまり一日三回以上ってこと。

引っ越してきた当初は、なぜ雪が降り続いている中で、ご近所さんたちが雪除けしているのか理解できなかった。止んでからすればいいのにサ。ハイ、止むまで待っていると手遅れなのでした。玄関の戸が開かなくなり、車は発進できなくなり、降り積もった大量の雪を除けるのには、想像以上の力と時間が必要になる。だから、小降りになったときを見計らって、せめて五センチ位でこまめに除ける。

さらに朝の七時前に、これまたご近所さんが、ガガガー、ゴゴゴー、グォングォンと雪除けを始めるのにも、当然ながら出遅れていた。なぜ、みなさん、そんなに早くから？私はゆっくりやらせてもらいますヨ。ハイ、そう考えた私は愚か者でした。通勤の車の轍ででこぼこに圧雪され、ほんのわずかとはいえ上昇する気温によってゆるんだ雪は、それはそれは「おぼだぐで（重くて）」。早朝の倍以上の労力が必要だ。

そんなことは、ここで暮らしてきた人にとっては何十年、何世代と積み上げてきた「当たり前」なのだ。それをなぜ私がおもしろがったり、くどくど説明しているのか、きっと不思議がるに違いない。暮らしてみればわかること、暮らしていないと想像の及ばないこと。そんなことがたくさんある。そして、それこそが「ここで生きる」という営みなのではないか。

遊佐町から望む冬の鳥海山

昨年三・一一の震災とその後の原発事故で、多くの農民が耕地を奪われた。地震や津波によって壊された土地ならまだ再生の望みはあるだろう。だが、いつになったら、放射能に汚染された土地で食べ物をつくる日が来るのか。

「農業を続けたい人には早く代替地を用意して支援してあげればいいのよ。日本全国に耕作放棄地はたくさんあるんだから。将来のわからないところで待つより、新しい場所と気持ちですぐにでも種をまけばいい

じゃない」

事故直後、政府や電力会社の対応にひどく腹を立てながら、東京の友人が言った。

私は同意できなかった。

農民は工場労働者とは違う。〝派遣〟された先で、どこででも同じように働けるわけがない。なぜなら、気候が、水が、風が、土が、人が、慣習が、あらゆることが、違うからだ。田植えの時期の水温は何度か、いつごろ風向きが変わるのか、どんな動物や害虫がいるのか、どんな信仰や祭りがあるのか、用水路や農道の普請は誰とするのか、出荷や販路は誰を頼るのか…。工場内さえ、働く環境が保たれていれば、外は夜だろうが地下だろうが海中だろうが問題の生じない第二次産業と違って、「暮らしてみればわかること、暮らしていないと想像の及ばないこと」と密接不可分にしか存在できないのが、農や漁というナリワイなのだ。

「そりゃあ、はじめはたいへんだろうけど、〝何年か〟やれば、そこでのやり方がわかるようになるでしょ？」

そりゃあ、わかるでしょうね。でも、例えば、コメづくりは年に一回しかできない。すべてを知り尽くした土地でさえ、毎年、「お天気」と、人の知恵との根比べのようなものなのだ。だから、日本の農業は、農家という世襲によって、技術や知恵を上手に受け渡し、発展・存続してきた。代替地で耕作するということは、その根比べの知恵袋を一から作り始めるということだ。〝何年か〟だって？　そんなに軽く言うべきではない。何十年という単位のはずだ。

ある土地で農民（漁民も）であるということは、「ここで幸せに生きる」という決意なのだと私は思う。

悔し涙に唇をかみしめながら代替地へ移った人も、汚染の懸念される土地に残った人も、それぞれがそれぞれの人生の根を「ここ」に下ろし直したのだ。

「農協も県も放射能検査をしています。前と何も変わっていないんです。なのに、消費者のみなさんは買ってくれない。直売所でいっつも売れ切れだった切り花も、今はほとんど売れ残って返品される。花ですよ、食べ物ではないんです」

昨年一一月、東京のある集会で三春町の女性が訴えていた。このたいへんな状況の中で頑張り続けられる支えは何ですか？　静岡から来たという男性が質問した。思いがけない内容だったのか、彼女はしばらく無言で考えた後、こう答えた。

「ずっとこんな状態なものですから、稲刈りができるのか、稲刈りはしてもコメが売れるのか、不安でした。でも夫が言ったんです。もし、放射能が出ても、オレら、つくったものは食うべなって。私も、うんって言いました」

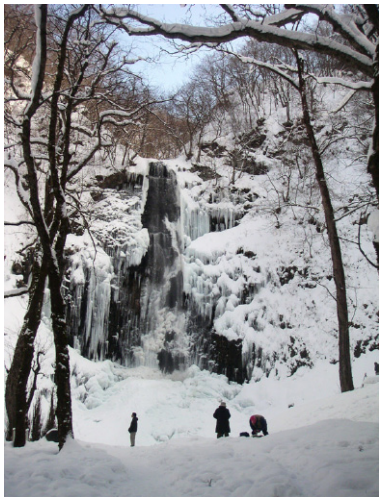
放射能が出ても、つくったものは食うべな―。

そうだよ、そうしよう。買って食べるだけの者にはわかるまい。これは、つくっている

者の特権だ。暮らしと労働と収穫物が不可分な農民なのだ。収穫したものが利用し尽くせないなら、次の種まきにつながらない。今年の時間を、今年の労働を、今年の暮らしを、来年につなげない。

人が一人そこで人生を送っている。そこで幸せに生きるために、土地と結びついて暮らしている。そのコツコツと積み上げつないできた決意と誇りは、東電が放射能をまき散らしたぐらいで、砕けない。

質問者や会場の人が、どれだけ彼女たちの「決意」を受け止めたかはわからない。ＴＰＰ賛成派の中には、より安全な食品を求め、放射能汚染の心配がない輸入食品を求める声もあるらしい。あわれな人たちだぜ。



凍結した玉簾の滝（酒田市）

氷の柱になった二の滝（遊佐町）

Photo : Suzuki Kyoko